

【公益社団法人新潟法人会長賞】

「八円、足りない」

新潟県立

新潟高等学校

二年 板屋越 優佑

ある暑い夏の日。祖母からもらった一枚の百円玉をぎゅっと握りしめ、私はルンルンと歩いていった。

向かっていたのは、行きつけの文房具屋さん。鉛筆を切らしていたことを思い出したのだ。たまたま百円ちよūdの鉛筆三本組があったので、それを手に取った。レジで支払いをしようとして百円玉をトレーに出した私に、いつもの店長さんが、微笑みながら優しく教えてくれた。

「実は、この鉛筆は消費税込みで一〇八円なんだよ。」

あれ……。値札には確かに「一〇〇円」と書いてあったはず。そもそも、「消費税」って一体何なんだろう。戸惑う私に店長さんは、「いつもお母さんと一緒に来ているから、分かんなかったみたいだね。暑い中せっかく来てくれたから、今日だけは特別に、百円で買っていいよ。」と、私に鉛筆を渡してくれた。ありがとうございます、と店長さんに何度も深く感謝を告げ、私はその場を去った。

家に帰るとすぐに、私は母に「消費税」について聞いてみた。

「消費税は、お買い物をするときに、少し多めに支払うお金のことだよ。税のおかげで、みんな教科書を使って勉強ができるんだ。」

今となってみれば分かりきったことだが、当時の私は、母の言ったことについてあまり理解していなかった。今、改めて考えてみると、税制はとてよく整えられている優れたシステムだと思う。消費税についてはいえば、国民全員から公平に集めることができるものだ。集まった資金の活用は、教育の場のみならず、医療の場、道路整備・上下水道の整備など、多岐にわたる。誰にとっても不可欠なものの整備はもちろんのこと、「富の再分配」など、低所得者や生活困窮者への配慮や、「児童扶養手当」など、子どものいる家族への配慮がなされているのも、とても魅力的だと思う。

そんな中、当時の私が幼いながらに持っていたのは、「教科書が無くなってしまふのは嫌だ」という強い思いだった。教科書の裏表紙に書かれている「無償」という言葉が、「無料」とは違うのだということを瞬間だった。私たちは、数え切れないほどの多くの人たちに支えてもらいながら、勉強ができていくのだと分かった。すでに当たり前のように周りにあるものを当たり前と思わず、全ての事物を大切に、大切に扱っていきたいと思った。

次の日、朝起きてすぐに、貯金箱から「八円」を取り出し、急いで家を出た。顔も名前も知らないたくさんの人への感謝の気持ちを噛み締めながら。